



Title	Gladの意味についての一考察
Author(s)	坂場, 大道
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2021, 2020, p. 11-20
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/84980
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

Glad の意味についての一考察

坂場 大道

1. はじめに

人間が持つ感情は、様々な分類が試みられてきた。日本語では「喜怒哀楽」という4分類もあるが、*anger, disgust, fear, happiness, sadness, surprise* のような7分類もある (Ekman 1992)。他方、語彙のレベルでは、上記の分類を遥かに超える数の感情を表す表現がある。例えば、「喜怒哀怖恥好厭昂安驚」の10種に感情を分類する感情表現辞典 (中村 1993) では、「喜」を表す語句として、「嬉しい」「幸せ」「喜ぶ」などの200以上もの表現を掲載している。

このように感情は様々な方法で分類されてきた一方、個々の語彙が表す意味の違いにはあまり関心が向けられてこなかった。感情を表す語彙を包括的に考察する数少ない研究の1つに Wierzbicka (1999) がある。同研究は、感情の7分類では *happiness* として一括されるような、英語の *joy, happy, contented, pleased, delighted, excited, hope, relieved* などの各語がそれぞれ異なる意味を持ち、感情の概念化の仕方において異なることを示した。しかし、感情語彙を広く扱う同研究には肯定的感情を表す語彙に *glad* が含まれておらず、その理由も述べられていない。¹大規模英語コーパス British National Corpus (BNC) の100万語ごとの使用頻度によると、*glad* は他の語よりも頻繁に用いられている (*glad* (38.27) > *joy* (28.99) > *delighted* (28.02) > *excited* (18.3) > *relieved* (16.36) > *contented* (3.52))。²

上記の理由から、本研究は *glad* の意味を考察する。また、Wierzbicka (1999) と同様に Natural Semantic Metalanguage (NSM) 理論に基づく *glad* の試案の定義を提示することで、先行研究で提示される他の肯定的感情語彙が表す感情との共通点および相違点を明らかにする。2節では NSM 理論の概要を示し、肯定的感情を表す語彙の先行研究を参照する。3節は *glad* の試案となる定義を提示し、4節で結語および今後の課題について述べる。

2. 先行研究

本節では、2.1 で Natural Semantic Metalanguage (NSM) 理論を概観し、2.2 で同理論に基づいて提示された Wierzbicka (1999) の肯定的感情を表す語彙の定義を参照する。2.3 では *glad* の意味について言及がある先行研究を概観する。

2.1 Natural Semantic Metalanguage (NSM)

Natural Semantic Metalanguage (NSM) (Wierzbicka 1999) とは、Semantic Metalanguage という名の通り、「意味」を記述するための分析枠組みであり、「言語」の意味を記述するた

¹ 守田 (2013) にも同様な指摘が見られる。

² 残りの2語の使用頻度は *glad* よりも高い (*hope* (174.6) > *happy* (115.1) > *glad* (38.27))。

めの「言語」である点において「メタ」言語である。**Natural** という言葉が示すように、NSM は「自然」言語から構成される。公式や特殊な用語などの「人工」言語を扱う理論とは対照的に、NSM は既存の言語のうちの、非常に限られた語彙をメタ言語として用いる。³ 英語の NSM では、以下の大文字で表記された約 65 個の概念のみ使用が許される。

Substantives:	I~ME, YOU, SOMEONE, SOMETHING~THING, PEOPLE, BODY
Relational substantives:	KIND, PARTS
Determiners:	THIS, THE SAME, OTHER~ELSE
Quantifiers:	ONE, TWO, SOME, ALL, MUCH~MANY, LITTLE~FEW
Evaluators:	GOOD, BAD
Descriptors:	BIG, SMALL
Mental predicates:	KNOW, THINK, WANT, DON'T WANT, FEEL, SEE, HEAR
Speech:	SAY, WORDS, TRUE
Actions, events, movement, contact:	DO, HAPPEN, MOVE, TOUCH
Location, existence, specification:	BE (SOMEWHERE), THERE IS, BE (SOMEONE)'S, BE (SOMEONE / SOMETHING)
Life and death:	LIVE, DIE
Time:	WHEN~TIME, NOW, BEFORE, AFTER, A LONG TIME, A SHORT TIME, FOR SOME TIME, MOMENT
Space:	WHERE~PLACE, HERE, ABOVE, BELOW, FAR, NEAR, SIDE, INSIDE
Logical concepts:	NOT, MAYBE, CAN, BECAUSE, IF
Intensifier, augmentor:	VERY, MORE
Similarity:	LIKE~WAY~AS

(表 1. 英語の semantic primes 一覧 Goddard and Wierzbicka 2014)⁴

表 1 の右側に記載された概念は、それよりも簡単な概念に分解できない意味元素であり、これまでの 30 言語以上の調査から、すべての言語に普遍的に存在すると考えられている。普遍であるのは「語」ではなく、「概念」である。すなわち、表 1 の概念はあらゆる言語において、何らかの形式で語彙化されている。語彙化の方法は言語によって異なり、オーストラリアの諸言語のうちの一つでは、BECAUSE にあたる概念は接辞尾で表される。

意味元素の一覧は、英語以外にも日本語版を含む約 30 以上の言語で展開されている。英語の NSM に基づく先行研究を参照する本研究では、英語版のリストを用いる。また、表 1 の意味元素は自由に用いられるわけではなく、個々の組み合わせ方に制限がある。以下は、意味元素の一つである FEEL において許される組み合わせである。

(1) someone FEELS like this

³ 自然言語を用いる背景には「あらゆる形式化は自然言語に依存する」という以下の Lyons の考えがある。
“[A]ny formalism is parasitic upon the ordinary use of language, in that it must be understood intuitively on the basis of ordinary language” (Lyons 1977: 12)。

⁴ 意味元素のリストは通言語的な調査に基づき数回更新されており、表 1 は 2021 年現在の最新版である。

someone FEELS something (good / bad)

someone FEELS something (good / bad) toward someone else⁵

このような組み合わせの厳しい制限によって、特定の言語における自然さを犠牲にせざるを得ないことがある。自然な英語では、動詞 *feel* は *good* などの形容詞が後続することが一般的である。しかしながら、この組み合わせは一部の言語において許されていないため、*feel something good* のように、*something* を間に挿入する必要がある。

NSM 理論は様々な領域に応用されており、感情語彙に関する通言語的な研究では、様々な種類の感情について明らかにされてきた (Wierzbicka 1999; Harkins and Wierzbicka 2001; Goddard and Wierzbicka 2014)。近年では、類似した意味を持つ概念をその定義に反映させるための雛形である *semantic templates* が提案された。以下は、英語の感情を表す形容詞をコピュラと共に用いた文 (例: *Someone X was happy.*) のテンプレートである。文が表す意味として、時系列順に並べられた (a) から (c) の3つの意味要素が提示されている。

(2) Semantic template for English emotion adjectives with verb ‘to be’;

Someone X was happy, angry, sad, ... (at this time)

a. this someone thought like this at this time:

b. “ _____
_____ ”

[model thought]

c. because of this, this someone felt something (very) good / bad

[feeling]

like people often⁶ feel when they think like this

[typicality]

(Goddard 2018: 72)

(2) は、感情が生起する過程について述べている。(2a) は、当該の人が漠然と思考している (‘thought like this’ であり、‘thought exactly this’ ではない) ことを示す。(2b) は思考の内容に相当し、[model thought] または [prototypical cognitive scenario] と呼ばれる。“prototypical” であるのは、(2c) に含まれる ‘often’ が示すように、すべての場合において必ずしもそうではないからである (Goddard 2018: 75)。*[feeling]* および *[typicality]* と呼ばれる (2c) は、[model thought] のように考えた人がしばしば感じるように、何かしらの感情を抱くことを示す。

英語の感情を表す形容詞は、概して (2) に示す概念構造を持ち、意味要素 (a) は共通している (Goddard 2018)。本研究が参照する肯定的感情を表す語彙は、意味要素 (c) も ‘feel something good’ で共通しているため、意味要素 (b) において違いが示されている。次

⁵ これら3つのパターンに加え、NOT や CAN も組み合わせることができる。

⁶ (2) の ‘often’ は表1の意味要素ではないが、ここでは ‘at many times’ の略語として用いられている。

節では、感情に関わる NSM 研究の中でも、感情語彙を包括的に扱う Wierzbicka (1999) を参照する。

2.2 NSM に基づく感情語彙の分析

Wierzbicka (1999) によって定義が提示された当時は、2.1 のテンプレート開発前かつ、意味元素のリスト改訂前である。本研究では、Wierzbicka (1999) をもとにテンプレートおよびリストの改訂を反映させた Goddard (2018) を参照する。とりわけ、*glad* の定義の比較対象として重要と考えられる *happy* および *pleased* の定義を取り上げる。(3) と (4) は、*happy*⁷ および *pleased* の定義であり、両語の意味の違いは意味要素 (b) に示されている。

(3) *He was happy (at that time):*

- a. this someone (= he) thought like this (at that time):
- b. “many good things are happening to me now as I want
I can do many things now as I want
this is good” [model thought]
- c. because of this, he felt something good [feeling]
like people often feel when they think like this [typicality] (Goddard 2018: 85)

(4) *He was pleased (at that time):*

- a. this someone (= he) thought like this (at that time):
- b. “something good happened before
I wanted this” [model thought]
- c. because of this, he felt something good [feeling]
like people often feel when they think like this [typicality] (Goddard 2018: 77)

まず、(3b) の ‘many good things are happening to me’ と (4b) の ‘something good happened before’ の違いを確認する。*happy* の意味特徴を説明する例として Goddard and Wierzbicka (2014: 102) では、以下の文章が引用されている。

- (5) He would rise, grab a pair of track-pants [...] and then perform a series of nine stretches, each of which he would hold to a count of thirty. [...] Then he’d go to the kitchen and switch on the coffee percolator before walking to the milk bar at the end of the street to

⁷ NSM では、*happy* の意味は多義と見なされる。例えば、‘I’m happy with my job’ という文は *happiness* を示さないという理由から、*happy with* の定義は *happy* の定義とは別に提示されている (Goddard and Wierzbicka 2014: 121)。本研究は、テンプレートの形式で用いられた場合の *happy* の意味を取り上げる。

buy the newspaper and a packet of cigarettes. Back home, he would pour himself a coffee, walk out on the back verandah, light a smoke, turn to the sports pages, and begin to read. In that moment, with the newspaper spread before him, the whiff of bitter coffee in his nostrils, the first hit of strong tobacco smoke, whatever the miseries, petty bullshits, stresses and anxieties of the day before or the day ahead, none of it mattered. In that moment, and if only in that moment, he was **happy**.

(Christos Tsiolkas, *The Slap*) (太字は筆者)

文章中の *he* と呼ばれる人物の人生は、決して順風満帆とは言えない。しかし、否定的な事柄について思考を巡らせず、自分の身に起きている肯定的な事柄に意識を集中させているこの瞬間、彼は *happy* と感じている (*‘many good things are happening to me’*)。

この意味要素は、*happy* が *pleased* より「一般的」な感情であることを示す (Wierzbicka 1999)。例えば、感情の誘因が一つに定まらず、*here* や *today* などの場所や時間によって示唆される場合、*happy* とは共起可能だが、*pleased* とは共起しにくい (= (6a, b))。

(6) a. I am {happy / ? pleased} here.

b. I feel {happy / ? pleased} today.

(Wierzbicka 1999: 56)

pleased は *‘I’m pleased to hear about your news’* のような特定の事態に対する反応 (*‘something good happened before’*) として用いられやすい。他方、*happy* は感情主体が自身の状況に対して起きている肯定的な事柄に意識を向けた、より一般的な評価 (*‘many good things are happening to me’*) と言える。

次に、(3b) の *‘to me’* の意味要素は、*happy* の感情主体が感情の誘因事態を「自分ごと化」していることを示す。例えば、昇進した同僚に *‘I am happy’* と発言した場合、その発話者は同僚に自分を重ね合わせ、その事態を自分にとって良いこととして捉えている (*‘to me’*)。他方、*‘I am pleased’* と言った場合は、その人物は「いいことが起こった」(*‘something good happened’*) と捉え、そのような特定の事態の発生を望んでいたこと (*‘I wanted this’*) が含意される (Wierzbicka 1999: 56)。

最後に、(3b) の *‘as I want’* および *‘I can do many things now as I want’* の意味要素は、*happy* の感情主体が、多くの事柄を自分の望み通りにできると考えていることを示唆する。これらの意味要素は、「物事が自分の思い通りになっている」と感じる点で *freedom* という概念と密接な結びつきがある (Goddard and Wierzbicka 2014)。Kövecses (1991: 31) も、*‘when we are free, we are happy’* という一般的な考えがあることを指摘している。

上記の理由に基づき、*happy* および *pleased* の定義が提示されている。次節では、3 節で NSM を用いた *glad* の定義を提示するため、*glad* の意味に関する先行研究を参照する。

2.3 Glad に関する先行研究

Glad の語の意味を中心に据える研究は非常に少ない。本節では、感情語彙を広く扱う 2 つの先行研究において、*glad* に言及がある箇所を取り上げる。第一に、Johnson-laird and Oatley (1989: 96) は、感情を 7 種類 (0. Generic emotions, 1. Basic emotions, 2. Emotional relations, 3. Caused emotions, 4. Causatives, 5. Emotional goals, 6. Complex emotions) に分け、感情を引き起こす事態を要求する Caused emotions に *glad* を分類している。その根拠として、Basic emotions に分類される *happy* とは異なり、*glad* は感情の理由が不明であることを示す表現と共起しにくい (= (7a, b))。代わりに、「冬の終わり」のような感情の誘因を表す表現と用いられることが一般的である (= (8))。

- (7) a. I am happy but I don't know why.
b. ?? I am glad but I don't know why. (Johnson-laird and Oatley 1989: 100)
- (8) I am glad that winter is over. (Johnson-laird and Oatley 1989: 100)

Bolinger (1984: 150) によると、*glad* は “pure feeling of gladness” を指示できない。すなわち、感情をただ感じることはできず、その原因に投射される (“the emotions are not merely felt, but projected on their cause”) 必要がある (Bolinger 1984: 52)。例えば、感情主体がその日に漠然と感じる感情を表す語として *upbeat* は容認されるが (= (9a))、*glad* はその原因が示されていないために容認されない (= (9b))。

- (9) a. She is feeling very upbeat today.
b. * She is feeling very glad today. (Bolinger 1984: 52)

このように、*glad* という語を用いるには、その原因が共起する必要がある事が指摘されてきた。3 節では上記の *glad* に関する先行研究から得られるデータに加え、コーパスでの具体例を検討することで、*glad* の意味を考察し、NSM を用いた定義を試みる。

3. Glad の意味分析

本節では、*glad* の意味について考察する。特に、意味が類似している *pleased* および *relieved* との比較から、それらの感情の概念化の仕方の違いを明らかにする。以下では、NSM に基づく *glad* の定義の試案を提示した後、各意味要素がどのような意図で提示されているかを、その根拠となる *glad* の用法から確認する。以下の (10) が、本研究が提案する *glad* の試案となる定義である。意味要素 (a, c) は英語の感情を表す形容詞のテンプレートと共通している。

(10) *He was glad (at that time):*

- a. this someone (= he) thought like this (at that time):
- b. “something good happened before
I wanted this
if it didn’t happen like this, I would feel something bad” [model thought]
- c. because of this, this someone felt something good [feeling]
like people often feel when they think like this [typicality]

(10a, c) は感情主体が漠然と思考しており (= a)、結果として肯定的な感情を経験することを示す (= c)。以下では、意味要素 (b) について議論する。

第一に、‘something good happened before’ および ‘I wanted this’ は、先行研究の *pleased* の定義と共通している。‘something good happened before’ は 2.3 の *glad* の先行研究とも関連している。以下再掲の例が示すように、*glad* は感情を引き起こす誘因が読み込みにくい場合は容認されず (= (11a))、「冬の終わり」のような具体的な原因を要求する (= (11b))。

- (11) a. * She is feeling very glad today. (Bolinger 1984: 52)
- b. I am glad that winter is over. (Johnson-laird and Oatley 1989: 100)

このような感情の誘因を要求する側面は、感情を引き起こす事態の発生を前提とすると言い換えられ、NSM では *pleased* と同様に特定の事態に対する反応 (‘something good happened before’) として捉え直すことができる。同時に、そのような特定の事態の発生を望んでいたこと (‘I wanted this’) が含意される。

pleased との唯一の違いである ‘if it didn’t happen like this, I would feel something bad’ という意味要素は、発生を期待していたような良い事態が発生していなければ、むしろ悪い感情を抱いていたという含意が *glad* にはあることを示す。この含意の違いについて、*glad when* と *pleased when* に後続する節の内容の比較を通じて検討する。BNC コーパスにおいて、前者は 92 件、後者は 93 件とほぼ同数の例が確認される。本研究では、この含意の違いについて前後の文脈から把握できる例に絞って考察する。

以下の *glad when* を含む 3 つの文では、期待していた事態の発生によって肯定的な感情を抱いているが、その事態は望ましくない事態の終了を伴っている。従って、もしその事態が発生していなければ、感情主体にとって不都合な状態になっていたことが含意される。

- (12) She hated her work in the coffee-house, standing all day long at the sink in the ill-ventilated pantry. She was **glad when** her work was done and she could walk back to the farm, filling her lungs with the keen moorland air. She cherished those walks.

- (13) Ianthe was **glad when** the woman and her child got out at the next station, for not only did she find the conversation embarrassing but she also wanted to think about the moments before her unexpected meeting with Agnes Dalby — moments which she had so far had no chance of reliving or considering.
- (14) Staff members said things like: ‘God, I’ll be **glad when** this term’s over,’ and ... ‘If this term lasts another day, I’ll be dead ... I mean dead!’ (BNC) (太字は筆者)

(12) では、換気の悪い状況で立ちっぱなしという過酷な仕事の終わり、(13) は間の悪い会話の終わり、(14) では大変な学期の終わりが *glad* と並行している。それぞれの感情主体は、期待した事態の発生によって肯定的な感情を抱くだけでなく、彼らが身を置いていた望ましくない事態が好転していなければ、不都合が生じていたことも含意されている。

次に、*pleased when* に後続する節では、*glad* と同様に、期待した事態の発生による肯定的な感情を抱いている。他方、望ましくない事態の終了は伴わず、その事態が発生していなかった場合に生じる不都合についての含意はあまり見られない。むしろ、以下の 3 例のように、期待していた事態が発生していなくとも問題がないような例が確認される。

- (15) On 10 March 1952 his mother died. According to Ricky Stride, he did not greatly grieve. He had always been **pleased when** she had called on him in London but made little effort to visit her in Carshalton. He was at this stage in his life too disinclined to indulge in retrospection and perhaps too self-absorbed to consider his mother’s life and death in the context of his own life.
- (16) John, one of the PPLs at our flying club, had made a beautiful job of building his little Jodel and I had followed his progress closely over the several years it had taken him to complete it. I was **pleased when** he asked me to do the test-flying programme for him and I had no qualms in agreeing, as I knew him to be a meticulous engineer.
- (17) That evening Marilla ran round to Rachel Lynde’s house. ‘Rachel, please help me! Anne says she won’t go back to school. What am I going to say to her?’ Mrs Lynde already knew about Anne’s troubles at school, and she was always very **pleased when** people asked her to help. She smiled and sat back comfortably. ‘I’ve had ten children myself, so I know all about them,’ she said. (BNC) (太字は筆者)

(15) の感情主体は、今は亡き母からの訪問によって肯定的な感情を抱いていた。しかし、自分のことに没頭していたために母を気遣っておらず、その訪問がなくても彼に問題があったようには思えない。(16) では努力を見続けていた人からテスト飛行を依頼され、それによって肯定的感情を抱いている。しかし、その依頼がなかったことで問題が生じるといふ含意は見られない。(17) では不登校の子供の対処法について助けを求められることを

歓迎しているが、この事態が発生しなくても感情主体に不都合はない。 *glad* とは異なり、*pleased when* に後続する節では、望ましくない事態の終了を伴わない。

glad は望ましくない事態を回避する点において、オックスフォード現代英英辞典等がその類義語として挙げる *relieved* と意味が類似している。最後に、この *glad* と *relieved* の違いについて検討する。まず、Ortony, Clore and Collins (1988) に基づいて提案された Wierzbicka (1999) による *relieved* の定義を確認する。以下は Wierzbicka (1999: 58) をもとにテンプレートおよび意味元素のリストの改訂を反映させたものである。

(18) *He was relieved (at that time):*

- a. this someone (= he) thought like this (at that time):
- b. “something bad would happen
I felt something bad because of this
I know now: this bad thing will not happen” [model thought]
- c. because of this, this someone felt something good [feeling]
like people often feel when they think like this [typicality]

(18) は、*relieved* の感情主体が「何か悪いことが起こる」という予感を抱き、それを理由に不快な気持ちになっていたが、その悪い事態が発生しないとわかった結果、肯定的感情を抱いたことを示す。(10) の *glad* の定義と比較すると、*relieved* は悪い予感が先立ち、それによって不快な気持ちを抱く点において異なる。以下の *relieved* と *glad* をともに含む (19) では、この違いが反映されている。

- (19) [E]verything's all dark and dirty. There's a horrible smell like a garage, and I'm scared. Then I see the way out. There's a gap in the wall, and it goes right onto the platform — there ain't no fence or nothing stopping me getting out. I'm real **relieved** when I see that, and head straight for the gap. I feel much better when I'm back on the platform, and I sit down for a breather. That was horrible in there, getting lost and that. I'm real **glad** to be out of that place.
(Nigel Watts, Billy Bayswater) (太字は筆者)

ひどい暗闇に閉じ込められた (19) の感情主体は、脱出を図っている。出口を見つけた時に感じた *relieved* は、暗闇で抱いた悪い予感 ('something bad would happen') によって不快な気分になりながら ('I felt something bad because of this')、その予感が現実にならないことを理解し ('I know now: this bad thing will not happen')、肯定的感情を抱いたことを示す。他方、脱出後に生じた肯定的感情を表す *glad* は、脱出という期待した事態の発生 ('something good happened before, I wanted this') と同時に、脱出できていなかったら不都合が生じていた ('if it didn't happen like this, I would feel something bad') ことが含意される。

このように、本節では NSM を用いて *glad* を定義することで、*pleased* や *relieved* と意味的に共通する側面を持ちながら、感情の概念化の仕方において異なることを示した。

4. 結語と今後の課題

本研究は、NSM に基づく *glad* の試案となる定義を提示することで、*pleased* や *relieved* によって表される肯定的感情との共通点および相違点を検討した。今回は *glad when* に後続する節などから、テンプレートに従う形式での *glad* の意味を考察したが、“Would you give me a hand?” などの助けを求める依頼に対する返事としての “I’d be glad to” のような表現では、本研究が主張する ‘if it didn’t happen like this, I would feel something bad’ という含意があるかは疑わしい。テンプレートとは異なる形式で用いられた場合の *glad* の意味や、*glad* の多義性については、今後の研究の課題としたい。

参考文献

- Bolinger, Dwight (1984) “Surprise”, in Lawrence J. Raphael, Carolyn B. Raphael and Miriam R. Valdovinos (eds.), *Language and cognition: Essays in honor of Arthur J. Bronstein*, 45-58, New York / London: Plenum Press.
- Ekman, Paul (1992) Are there basic emotions? *Psychological Review*. 99 (3): 550-553.
- Goddard, Cliff (2018) *Ten lectures on Natural Semantic Metalanguage: Exploring language, thought and culture using simple, translatable words*. Leiden: Brill.
- Goddard, Cliff and Anna Wierzbicka (2014) *Words and meanings: Lexical semantics across domains, languages and cultures*. Oxford: Oxford University Press.
- Harkins, Jean and Anna Wierzbicka. (Eds.) (2001) *Emotions in crosslinguistic perspective*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Johnson-laird, Philip, and Keith Oatley (1989) The language of emotions: An analysis of a semantic field. *Cognition and Emotion*, 3: 81-123.
- Kövecses, Zoltan (1991) Happiness: A definitional effort. *Metaphor and Symbolic Activity* 6 (1): 29-46.
- Lyons, John (1977) *Semantics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 守田貴弘 (2013) 「意味的分類の科学的妥当性」 『言語研究』 144: 29-53.
- 中村明 (1993) 『感情表現辞典』 東京: 東京堂出版.
- Ortony, Andrew, Gerald Clore, and Allan Collins (1988) *The cognitive structure of emotions*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Wierzbicka, Anna (1999) *Emotions across languages and cultures*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.

データ資料

The British National Corpus [BNC] (<http://corpus.byu.edu/bnc/>).